

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 教務委員会

(責任者名) 三浦 正士  
 (役職名) 教務委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等														
学内からの視点																
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムは令和6年度より開設し、全学共通の必修及び選択科目として位置付けている。対象は2学部3学科(グローバルマネジメント学部グローバルマネジメント学科、健康発達学部食健康学科、健康発達学部子ども学科)に所属する全ての学生とし、1年次から4年次まで学年を問わず履修可能な体制を構築している。</p> <p>学年別履修・修得状況 ( )内習得者数</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>1年生</td> <td>2年生</td> <td>3年生</td> <td>4年生</td> </tr> <tr> <td>令和6年度</td> <td>17名(16名)</td> <td>0名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> </tr> <tr> <td>令和7年度</td> <td>43名(43名)</td> <td>2名(1名)</td> <td>0名</td> <td>0名</td> </tr> </table> <p>【履修推移】: 1年次生の履修者数は前年度比で約2.53倍(17名→43名)と大幅に伸長しており、オリエンテーションを通じた周知の効果が顕著に現れている。                  【学年構成】: 現状は新入生による履修が主体であるが、これは既設の時間割との兼ね合いや、上級生への制度浸透が途上であることが要因と考えられる。                  【今後の課題】: 引き続き、全学総合教育科目としての利点を活かし、上級生への再周知を行うことで、全学年における履修機会の定着と修得率の向上を図る。</p>		1年生	2年生	3年生	4年生	令和6年度	17名(16名)	0名	0名	0名	令和7年度	43名(43名)	2名(1名)	0名	0名
	1年生	2年生	3年生	4年生												
令和6年度	17名(16名)	0名	0名	0名												
令和7年度	43名(43名)	2名(1名)	0名	0名												
学修成果	<p>全開講科目を対象に毎学期末「学生による授業評価アンケート」を実施し、授業外学修時間や目標達成度等から学修成果を多角的に分析している。結果は担当教員へフィードバックするとともに、FD活動の基礎資料として組織的に活用。教員が指導方法の省察と改善計画策定を行うPDCAサイクルを確立し、教育効果の不断の向上を図っている。</p>															
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>「データサイエンス入門」の授業評価アンケートでは、目標達成度が67%と概ね良好な一方、関心向上(51%)や満足度(46%)に課題がみられた。この結果を担当教員へ直ちにフィードバックし、組織的な共有を図っている。今後はこれを次年度の授業設計における重要材料とし、学生の興味を惹きつける事例の導入や指導方法の工夫を行うことで、教育効果のさらなる向上を追求する。</p>															
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>「データサイエンス入門」における授業評価アンケートの結果、「授業への取り組みの熱心さ」に関する肯定的回答が88%となり、全学平均94%を下回る結果となった。この要因として、学生には当該分野における数理・データサイエンス・AIの社会的重要性が十分に浸透しておらず、学習の意義を見出せていない学生が一定数存在することが推察される。今後は、専用ページに受講生の感想等を掲示することでコンテンツを拡充し、実社会での具体的な活用事例やキャリア形成との関連性をより強調して発信することで、学生の学習意欲の向上と、次年度以降の受講勧奨を強化していく。</p>															
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>本教育プログラムの基幹科目である「データサイエンス入門」については、令和10年度からの全学必修化を視野に、履修者数および履修率の更なる向上に向けた全学的な取組を検討している。体制面では、各学部から選出された教員による「教務委員会」を定期的に開催し、各専門分野の知見を教育内容に反映させている。具体的には、学生の専門分野との親和性を高めるカリキュラムの見直しを継続的に検討しており、学びの有用性を可視化することで、学生の主体的な履修を強力に促進している。</p>															
学外からの視点																
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>本プログラムの修了生(卒業生)が輩出されていないため、当該項目に関する自己点検・評価は対象外とする。</p>															
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>本教育プログラムの設計にあたっては、企業等での実務経験を有する実務家教員が参画し、産業界で求められるデータ活用スキルをカリキュラムに反映させている。具体的には、単なる理論習得に留まらず、実際のビジネス現場におけるデータ分析事例や課題解決プロセスを授業内容に組み込むことで、社会実装に即した教育手法を確立している。</p>															
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>本授業では、データサイエンスの基礎素養を修得し、データを扱う際の倫理的・技術的注意点を理解することを目指す。Excelを用いた演習を軸に、記述統計によるデータ整理や可視化の技法、統計処理の実践と分析結果の適切な解釈について学ぶ。特に、分析結果を自らの言葉で言語化するプロセスを重視し、「データに基づき論理的に語る楽しさ」を醸成する。あわせて、最新の生成AIの活用とデータ分析の関係性についても概説し、現代社会における学びの意義を体系的に理解させる。</p>															
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	<p>学生アンケートの結果を詳細に分析し、肯定的回答が相対的に低かった項目(「授業内容の説明の分かりやすさ」等)については、速やかに当該教員および教務委員会へフィードバックを実施している。これにより、個々の教員の努力に留まらず、組織として授業改善に取り組む体制を構築した。今後は、教材の視覚的改善や教授法の見直しを継続的に促すことで、教育の質向上と「分かりやすさ」の徹底を組織的に推進する。</p>															
※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載																